

秋まきえんばくの品種

続
省

九月から十一月にかけては、酪農家にとっては大切な秋冬作飼料作物の播種期である。わけても青刈えんばくは、暖地の酪農家にとって、もっともなじみの深い作物で、酪農家ばかりでなく、役用牛馬の飼料作物として長い間作られてきた。

青刈えんばくは、実取用品種のうちで青刈収量の高い品種を青刈利用しているわけである。数百品種もあるなかから、過去十数年間に百品種くらい比較試験に用いられ、全国各地で奨励あるいは有望と認めた品種は約二五品種もある。これらの比較試験の成績によると、品種間の収量差が三〇%以上もあるものもあるから、畜産経営上、多収穫品種の選定は大きな問題になるだろう。

つぎに、実際に農家が入手できる品種の中から、その地方の気象や土地条件とか、利用目的などから、どの品種を選ぶとよいか解説することしよう。

◎青刈えんばくの利用の現状

えんばくは戦前馬用の濃厚飼料として、

馬産地である北海道、東北、九州などで広く栽培されたが、戦後、酪農の発展に伴って、青刈用としての栽培が多くなってきたものである。

昭和三十年頃から飼料作物は年々順調に伸びてきたが、その中でも青刈えんばくは

急速に作付面積が増加している。昭和三年に全国で一萬一、〇〇〇haが作付され、たが、三十八年には二万六、七〇〇haと五年間に約二五倍に増加した。作付の多いのは内地では九州、関東、中国の順で、いずれも冬作として、秋まきされている。

青刈えんばくの利用の形は、青草として青刈利用するのが主体で、その大部分のが一~二回刈され、三回刈以上というの非常に少ない。この点、イタリアンライグラスは二~三回刈が一般に可能であるため、最近では青刈利用のためにはイタリアンライグラスを作付する農家が多くなっている。

したがって、青刈えんばくの利用の目的も、一回刈のサイレージ利用、あるいは二回刈を青草利用、第二回刈をサイレージ利用といった、サイレージを目的とするものが多くなっている。三三年に調査した結果では、サイレージ原料としては夏作物では青刈とうもろこし、いもづるで、冬作物としてはれんげと青刈えんばくが多い。しかし、青刈えんばくは水田でも畑でも適しているうちに、その開花期以降登熟期に刈取れば、良質のサイレージが容易にできる点から、サイレージ原料としての青刈えんばくの栽培は、今後ますます増加することと予想される。

第1表 酪農家における青刈えんばくの10a当たり収量

年次	全 国	北 海 道	内 地
	kg	kg	kg
33	3,272	1,698	3,484
34	2,689	1,249	3,228
35	2,516	1,273	2,849
36	3,259	1,606	3,608

(注) 各年次牛乳生産費調査成績より

青刈えんばくを二〇kg当たり五、〇〇〇kgまでくらいいの水準にあって、農家の栽培に当たっての注意によって容易に五、〇〇〇kgまでの目標は達成できるはずである。

◎青刈えんばくの多収穫栽培

青刈えんばくを二〇kg当たり五、〇〇〇kgまでくらいいの水準にあって、農家の栽培に当たっての注意によって容易に五、〇〇〇kgまでの目標は達成できるはずである。

定は、次に詳しく述べるので、その他のことで注意すべき点は次のようことであります。

施肥量については、一般に実取麦の倍量は必要といっているが、実際は実取麦ほど施肥しないことが多いようだ。実取麦と方が一〇kg当たり窒素分で約二五倍、磷酸二分で約二・五倍、カリ分で約四倍くらいに青刈えんばくの養分奪取量を計算すると、約四ドの生草収量のとき、青刈えんばくの施肥が必要なことがうなづけるところだ。一般的みて、青刈えんばく一〇kg当たり五ド収穫するには堆肥一、五〇〇kg、硫酸五〇kg、過磷酸石灰五〇kg、塩化カリ一五kg程度は必要であろう。とくに窒素分は粗蛋白質含量を高め、乾物量も増大させ肥効が高い。ただ、青刈えんばくは作付期間が長く、窒素肥料は元肥と追肥に分施する方が望ましい。一般に元肥に、追肥はを二回にするか、元肥は、追肥は二回くらいに分施する。また、カリ肥料も二回程度は追肥にまわした方がよいだろう。

このほか牛糞を追肥すれば、なお効果が高くなる。

つぎに播種期については、土地利用の関係もあるが、一般暖地で十月中旬、下旬が適期である。東北南部になると九月下旬から十月上旬になる。利用の関係からみると暖地で九月上、中旬に播けば年内一回と翌年一~二回収穫でき、十月中旬以降では年内収穫は無理で、翌春一~二回収穫となる。

播種量は、厚播き(一〇kg当たり二〇kg)

八立)は第一回の収量は多いが、再生が悪く、二三回刈を行なうためには薄播き(一〇kg當たり一〇~一二立)の方がよいと
いう成績がある。また播き幅も広くした方
が茎葉の茂りぐあいが適当で、収量も高くな

るものである。最近は耕うん機を利用して全層まきも行なわれるが、この場合は播種適量を二〇%増とするとよい。

○青刈えんばくの多収品種の選び方

現在市販されている青刈えんばくの品種数は、せいぜい一〇品種ほどであるが、これらの中でも、収量に二~三割の開きが出るのであるから、多収穫を目指す場合は、その経営条件に適した品種を選ぶことは非常に問題である。

まず、青刈えんばくの品種には、秋まき性の高いものと低いものの二種がある。低いものを分りやすいように春まき性と呼ぶこととして説明すると、春まき性品種は主として北海道で採種されているもので、寒さに弱く、草立ちが早く、直立型で分けつが少ない。春まき性の代表は前進で、もつとも作付が多いものである。秋まき性の高い、秋まき性品種は寒さに一度遙わないと出穂しない性質があるので、この強さに種々の段階がある。しかしこれでは、小麦などのように広い段階にわたるのではないが、一般的に秋まきすると、冬期間はほふく型で、分けつが多く、寒さに強い。この秋まき性品種の代表は日向黒や岡山黒などで、西南暖地で利用されている。

(1) 県別の奨励あるいは有望品種
昭和三十四年に畜産局で各県に照

第2表 青刈えんばくの地方別選奨あるいは有望品種

(註) 1) 昭和34年11月、畜産局編「地方府別飼料作物の栽培利用に関する資料」より抜す。
2) 山形、埼玉、滋賀、京都、兵庫、鳥取の府県は前准が良品種

- 2) いわく、弓削、貢、良、弓削、良、弓削の原野より前進が過程に
 3) その他の品種=北海道は北洋、勝冠、太洋、黒実1号、ホナミ
 青森は栄進、東京は栄進、レッドアルゼリアン、愛知はタシモ、
 兵庫早生、広島はグレイスデヒーバー、サーダグラスヘイン、山
 口はレッドアルゼリアン、カータースブランクッターター、高知は
 カータースラスクスター、福岡は日向白、宮崎は日向早生。

う。種が付う。(2) 利選を青刈り、生草とし、合は、是分けつが品種が達目的では黒、岡山、雪印で、また開

(2)

種が付け加わることになる。

○～二〇% 収量が高い。二回刈ると同程度か、逆に秋まき性品種の方が二〇～三〇% 収量が高いという結果が、多くの試験成績からいえるようである。

青刈元久

生草として給与する目的の場

種から詰算して、サツレの日用として春まき性品種をある面積作付けし、また青草利用の目的として秋まき性品種も作付けると

いうふうに、二種類作付ける必要が出てくる

(3) 播種期と利用時期と品種

までと幅が広く、また利用期も早まきでは

年内から始まり、五月までと約半年に及ぶが、この作付期間と品種の選び方も重要で

ある。内地の青刈えんはくの土地利用は、水稻普通作や甘藷の跡に十月中旬に播くの

がもつとも多い。

ためには、前進やビクトリー一号などがよ
く、赤手の都合で四月口、六月こ又蔓にて

く 跡作の都合で四月中に下旬は収穫しよ
うとすれば、早生の日向黒やバージニヤグ

レイなどが適する。

ができる場合は、早生の日向黒、岡山黒などをまくと、十一月、三月、四月と三回刈

ができる、この場合は早生種でも合計収量はかなり多くなる。

かなり多くなる。

で十一月になってから青刈えんばくの晩まきの場合は、寒さに強い早生の日向黒や岡山黒のような品種をまくとよい。また水

この調査以降、畜産局の助成で、一四道県で優良系統の比較栽培を行なつたが、その結果、有望品種としてカーネースプラッグターター、雪印改良一〇一号、リコールドブルーフ、雪印改良太豊などが上つてい る。今後改良選抜が進めば、なお新しい品

ものから、青刈えんばくの県別の奨励ある
いは有望品種を書き抜くと第二表のとおり
である。

稻の落水期である十月中旬に、落水後三日目ぐらいをねらって、稻立毛中にまく方法もあるが、この場合はビクトリー・バージニヤグレイなどのように、中晩生種が適する。品種の早晚は、利用時期とか土地利用計画上重要な問題で、出穂期を基準として区別すると、早生種は日向黒、岡山黒、中生種としてバージニヤグレイ、中晩生種としてビクトリー、晩生種として前進、ホワイトターテーなどとなるようである。

(4) ベッヂとの混播に適する品種
青刈えんばくとコモンベッヂとを混播する方法は、イネ科とマメ科との混播の効果として蛋白質の増収と窒素肥料の節約が可能で、西南暖地でかなり普及されている方法である。この場合、青刈えんばくの品種としては、コモンベッヂの生育と合ったものが望ましく、またベッヂの巻ひげがからみについて支柱となるためには、青刈えんばくが茎立ちがよく、倒伏しにくいしっかりしたものが必要で、このような品種としては、コモンベッヂの前進、ホワイトターテーのよろな品種が適している。

(5) イタリアンライグラスとの混播に適する品種

最近、青刈えんばくにイタリアンライグラスを混ぜて播く例がかなり多くなったが、これは青刈えんばくの初期生育が速かである点と、イタリアンライグラスの再生力の強い点を組合せて、平均した収量を得ようとする方法で、また青刈えんばくが冬枯れを起すおそれのある地域で、安全性を高めるため混播することも多い。

この場合、青刈えんばくの品種として、何がよいかという試験は未だないが、考え方としては、青刈生草利用に重点をおくるから、秋まき性の再生力が強く、生育の速い日向黒や岡山黒などがよいと考えられる。

◎青刈えんばくの品種
青刈えんばくは秋まき性の程度によつて、大きく二つのグループに分けられる。しかし、実際にはその中間に属する品種もあるが、ここでは春まき性品種と秋まき性品種に区分して解説してみよう。

(1) 春まき性品種
春まき性品種としては、前進、ビクトリー一号、ホワイトターテーの三種が從来普及していたが、最近雪印種苗で改良した太豊は有望であり、また中晩生に属するグレイスデヒーバーは耐寒性も強く、冬枯れの長は長い。現在新嘉種畜牧場で原種が採種されている。

○前進
北海道の優良品種となつたもので、原名をオンワードという。なおオンワードの原名で栽培している地方もあるので注意を要する。現在北海道でもっとも実取栽培の多い品種で、青刈用として全国各県で奨励あるいは有望品種とされて、作付面積も多い。

内地の秋まきした場合は、晩生に属し、葉幅広く、葉茸に毛があり、やや短稈である。現在宮崎県で昭和十年に奨励品種に指定したもので、日向改良黒ともいっており。宮崎大学の神崎氏がブラックターテーより純系淘汰したもので、戦前より鹿児島、宮崎両県ではブラックターテーが広く

四二年輸入したもの北海道農業試験場において大正七年以来純系淘汰を行なつて、大正十二年に北海道奨励品種になつたもので、現在採種栽培は前進に次いで多い。

青刈用としては、内地では中晩生に属し、茎秆は粗剛で太く、葉色濃く、葉幅は前進よりやや狭い。二粒種で穂型は開散、穗長は中位で莢は少ない。各県の試験成績では前進より多収の県が多い。

○ホワイトターテー
米国から明治三十九年輸入したときわめて吉い品種で、白片穗ともい、現在北海道における採種は減ってしまった。青刈としては晩生に属し、稈長は長い。現在新嘉種畜牧場で原種が採種されている。

○太豊
雪印種苗株式会社で改良した品種で、晩生に属し、葉は大きく、莢は太く、分けつも多く、多収。葉は濃緑色である。

○太豊
雪印種苗株式会社で改良した品種で、晩生に属し、葉は大きく、莢は太く、分けつも多く、多収。葉は濃緑色である。

○秋まき性品種
秋まき性品種としては、暖地で從来から栽培とされてきた日向黒、岡山黒、バージニヤグレイが主体であるが、最近の試験結果では雪印改良一〇一号、リコールドブルーフなども成績がよく、また雪印種苗で改良した豊葉も有望である。

○日向黒
宮崎県で昭和十年に奨励品種に指定したもので、日向改良黒ともいっており。宮崎大学の神崎氏がブラックターテーより純系淘汰したもので、戦前より鹿児島、宮崎両県ではブラックターテーが広く適している。(農林省畜産局 農林技官)

○ビクトリー一号 スエーデンから明治

四二年輸入したもの北海道農業試験場において大正七年以来純系淘汰を行なつて、大正十二年に北海道奨励品種になつたもので、現在採種栽培は前進に次いで多い。

栽培されていた。

青刈用としては早生で、冬期はほふく型、若林技師が試作したビクトリー系統の中に混っていた黒色種子を分離したもので、早生に属し、日向黒と特性が似ている。岡山改良黒ともいっており、中国地方、関東地方などに普及をみている。

○岡山黒
昭和二十一年に岡山県農試の若林技師が試作したビクトリー系統の中には中生に属し、日向黒より出穂は約五日遅い。特性は日向黒に近く、九州その他の他地区の青刈利用に適している。現在、宮崎種畜牧場で原種が採種されている。

○バージニヤグレイ
秋まき性品種の中では中生に属し、日向黒より出穂は約五日遅い。特性は日向黒に近く、九州その他の他地区の青刈利用に適している。現在、宮崎種畜牧場で原種が採種されている。

○雪印一〇一号
一九三四年に北海道農試でソ連のレニングラードより取寄せたR六六二〇号を、一九五一年に雪印種苗上野幌育種場で分譲を受け、この中から純系淘汰を行なつて、耐寒性が強く、ほふく型で多けつ性の晩生のものを選抜育成して、この系統名が附されたものである。秋まき性品種の中では晩生に属し、収量が高い。東京、静岡などの県試験場の成績では非常によい結果が上っている。

○豊葉
雪印種苗株式会社で改良した品種で、秋まき性品種の中では極晩生に属し、分けつ多く、葉数が多いことからこの名称が付けられた。草質軟らかく、青刈利用に適している。(農林省畜産局 農林技官)